■威海における北東アジア経済サミット

ERINA所長　吉田　進

2002年５月２日に、中国山東省威海市にて「北東アジア経済サミット」が開催された。このサミットは、中国国務院が今年参加する二つの大型国際会議のうちの一つである。もう一つは、４月11日に海南島で開かれたボアオ･アジアフォーラムで、小泉首相も出席した会議であり、WTO参加後の中国のアジア、特に東南アジア諸国対策の一環をなすものであった。

今回の威海サミットは、中華全国工商業連合会、光彩事業促進会、中国国際貿易促進委員会、経済日報社と山東省政府が合同主催で開催した。会議には、海部俊樹・前総理大臣、李洪九・韓国前総理、アマルザルグロ・モンゴル共和国総理を始め、国会議員、経済界代表、学者が参加した。中国側からは、李嵐清・副総理、王兆国、宋健、経叔平・中国政治協商会議三副主席、張高麗・山東省省長などが出席した。

北東アジアを中心にした会議はここ数年来中国主催では行われていない。これまで中国にとっての中心課題は西部大開発であったが、近年は、北東アジアにおける政治的な安定、経済的な発展も重要な課題として取り上げられるようになってきた。今回の会議のテーマは、「中国のWTO加盟と21世紀の北東アジア経済」であり、「北東アジアに足場を置き、同地域の発展に関心を寄せる各界の人々に情報を提供し、交流を発展させ、協力のきっかけを探す機会を提供するものである」(李嵐清・副総理の開会の挨拶より)。

本会議で設けられた分科会は、「21世紀の北東アジアの経済発展」、「北東アジア各国間の貿易経済協力と文化交流」、「北東アジアの産業分業と協力」、「北東アジアの地域経済協力のメカニズム」で、それぞれ、東西センター顧問・趙利済氏、日中経済協会副会長・古賀憲介氏、筆者、韓国全国経済人連合会専務理事・鄭泰承氏がコーディネーターを務めた。

各国代表による熱意ある発言

会議の冒頭に、張高麗・山東省省長が「交流と協力を拡大し、共同の繁栄を実現しよう」というタイトルで講演を行った。各分野の有利な条件が山東省と北東アジアの協力に物質的な基礎を作り上げていること、WTOの規則をお互いに遵守することは協力を発展させる上で大きな原動力となることなどを述べた。WTOへの加盟は、中国の対外開放の新しい出発点であり、山東省の対外開放が新しい段階に入ったことを意味する。それは、新段階の対外交流と協力に更に高い要求を提起している。山東省は、平等互恵、共同発展の原則に基づき、北東アジア諸国とのより高度な協力を発展させたい、と地元の決意を表明した。

この会議では、24名の各国代表が発言した。日本の発言者は、NEC会長・佐々木元氏、富士通総研・福井俊彦氏、住友商事会長・秋山富一氏、日本経済新聞副社長・杉田亮殻氏、伊藤忠中国研究所長・藤野文晤氏、古賀憲介氏、及び筆者であった。

韓国からは、韓国貿易協会会長・金在哲氏、三星物産代表理事･会長・玄明官氏、韓国毎日経済新聞社社長・張大煥氏、鄭泰承氏が発言した。

分科会「北東アジアの産業分業と協力」について

このセッションのコーディネーターを筆者が担当した。討議した内容は以下の通りまとめられる。

① 今回のサミットの背景とその意義

中国がWTOに加盟したことによって、北東アジアに大きな変化が起こりうる。その変化は北東アジアに新しい協力体制を構築する可能性を提供する。こうした点からみて、この時期のサミット開催は、政治的・経済的に大きな意義がある。

② 北東アジアの経済状況の分析

まずマクロ的な分野では、韓国・全国経済人連合会の鄭泰承氏が各国の主要工業産品特化指数を用いて詳細な分析を行った。各国の経済水準が向上してきたため、重力理論の適用が可能となったことを強調した。

次に個々の産業分析が行われ、関連企業の戦略に触れられた。鉄鋼分野では、POSCOの趙成植常務が中日韓の鉄鋼共同体構想を打ち上げた。ITの分野ではNECの佐々木会長が日中韓のそれぞれの強さと発展方向を見事に描き出した。自動車分野では、中国の第一汽車集団の徐建一副総経理が、自己努力と海外の優秀な技術を結合させる重要性について述べた。家庭電化製品の生産については、創維集団の黄宏生董事長が松下、三菱、東芝、三星、LGなどとの協力を通じて中国企業が優良な企業に転化した過程を説明した。三角集団の丁玉華董事長は、北東アジアにおけるタイヤ産業の状況と今後の展望について触れた。「中国は世界のタイヤ産業がもっとも注目している市場であり、主要な投資市場であり、今世紀においてタイヤ産業発展の主戦場となろう」と述べた。

各国企業の戦略に関連して強調されたのは、労働力と膨大な市場性を背景に、中国は間違いなく「世界の工場」となるといった点である。世界の企業は、「中国市場への進

出」をスローガンに投資を増大させるであろう。その時、日本と韓国には「空洞化」が生まれる。それを意識した産業構造の改革、知的産業の発展など具体的な対策が必要である。その時の相互関係は対立、紛争ではなく、対話であり、企業間の国際協力である。

③　今後の発展趨勢

黄宏生氏は、この地域の10年後の展望について10項目からなる予測を行なった。その他の発言者も、企業間の国際協力、分業、人材交流、産業構造の改革、合理的な競争と協力の展望に触れた。その中でも国際協力はより重要な役割を果たす。北東アジア経済全体の体質が変わり、グローバリゼーションとリージョナリズムが結合し、新しい分業・協業体制が生まれなければならない。こうした中で注目を浴びたのは、北東アジア鉄鋼共同体構想と北東アジア諸国間での電子商取引（Ｅコマース）の実用化である。

また、文化方面では、黄氏が「北東アジアにおける孔子の哲学と儒教思想の普及に関連し、孔子の思想と文化の北東アジア諸国への橋渡しとなりたい」との願望を述べた。

会議の合間の昼食会で、宋健・副主席が、各国の漢字の簡略化がそれぞれの方向に進んでおり、このままでいくとお互いに通じなくなる、各国で、統一簡略漢字を制定してはどうかという提案があった。日本は字画の略式化を進めているが、中国では発音による当て字を使う場合があり、それが相互認識を阻害している。韓国でも最近漢字の復活が奨励されているので、これは北東アジア特有の差し迫った課題であろう。最後の総括セッションでも趙利済氏が本件に触れた。

総括セッションでの討論

総括セッションでは、各セッションのコーディネーターが討議した内容を報告した後、意見交換に入った。

総括セッションのコーディネーターである龍永図・中国対外貿易経済合作部副部長は、「このサミットが成功した一つの原因は、経済のグローバル化の背景下で、世界の地域、あるいは局部的な地域における経済協力の発展が大きな力をもってきたことにある。このような情勢下で、どのようにして北東アジア地域の経済協力を強化するかが、各国政府、産業界、学界の注目の的となってきた。中国のWTO加盟は、21世紀の北東アジアの経済協力の展望に大きな影響を与える。従って、中国が北東アジア諸国との友好協力関係を深めることは差し迫った課題である」と述べた。

官民の対話のメカニズムを作り、協力の具体的な分野を明らかにし、国際貿易における法律による保護を強化し、Ｅコマースを発展させ、人材と文化交流をさらに活発化させるなど、出席者は活発な意見交換行なった。

龍氏は、中国は北東アジア諸国との間で、エネルギー、交通、環境保護の分野で、すでに協力の基礎を作り上げている。このような交流を基礎とし、協力を一層強めなければならない。また国家間の貿易紛争が起こった時には、WTOの枠組みの中で解決するよう努力しなければならないと所見を述べた。

最後に

今回、中国が国務院の肝入りで、なおかつ民間組織を基礎に北東アジア経済サミットを開催したことは画期的なことである。龍永図氏が「私は、200名の中国代表と北東アジア経済サミットに出席し、討議に参加した感激を今でも忘れない。すばらしい会議だった」と総括セッションで述べ、「韓国でもこのような企画が考えられているというがどうか」と質問している。

彼は、各国間の北東アジアにおける多国間協力に中央政府がもっと協力的であるべきだと強調し、関係組織の横の連携が求められていると述べた。この横の連携を強めるには、中国としても国家あるいは地方行政主導型の組織では対応できないと痛感してきたのではないか。またWTOへの参加が新しい展望を切り開くという信念で今回のサミット開催に踏み切ったと思われる。その論理から言うと、この会議は今後とも継続されることになろう。

追記　この会議が威海で開かれたことについて

「中国で一番東にある都市はどこか」と聞かれて、私はとっさに丹東と思ったが、実は247万の人口をもつ威海である。ここは秦始皇帝の時代に長寿の薬を求めて1,000人の男女を日本に派遣した出発点である。それを示す記念碑があると同時に、高い塔があり、そこには「敢與隣国隣区比高低　1984年　胡躍邦」（隣国や隣の地域と高低を勇敢に比較しよう）と書かれている。対岸には進んだ国の日本と韓国があり、これらの国に追いつけ、追い越せという気持ちを表したものだという。その断涯に立つと、その気持ちが理解できる。

現在、威海には山東大学威海分校とハルビン工業大学威海分校があり、前者には7,500名の学生がおり、日本学科では３名の日本人教師が教えているという。また、威海と韓国の仁川との間には毎日2,000トンのフェリーが運行し、仁川空港との間には毎日航空便がある。山東半島は、北京～天津と上海～福建の中間にある。この地政学的地位からも北東アジアの一角として中国が威海を重要視しているこ

とがわかる。